
バンパイア & パンプキン！

水都森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バンパイア&パンプキン！

【Nコード】

N9574M

【作者名】

水都森

【あらすじ】

一年に一回のイベント、ハロウィーン。子供たちは思い思いに仮装し、戸口に立ち、言う。「トリックオア、トリート！」お菓子を喜ぶ、元気な声の響く裏側で、彼女は憂鬱に呟いた。「…早く終わらないかな、今日」

一日バンパイア

只今の時刻、7時10分。

水曜日、平日である。

私は16歳で、現役女子高校生だ。

勿論、学校がある。

「ルナっ！！いい加減に起きなさいっ！！」

甲高い母さんの声が、狭い家の中に響き渡る。

朝に弱く、中学のころは遅刻の常習犯だった私。高校の単位制で遅刻しまくりはマズイからと、母に朝起こしてくださいと頼んだ次の日から、スパルタ目覚ましが始まった。そのお陰で、入学以来、無遅刻無欠席を誇ることができていたのだが…

……でも、今日は行きたくない。

「朝よ、起きなさいっ！！」

寝ている時ならまだしも、目をパッチリ開けている時、母さんの叫び声はかなり頭に響く。どうやらずっと無視していたら、沸点に達してしまったらしい。とても、煩い。

母さんの怒鳴り声から身を守るため、私は布団を頭から被った。

「…ルナあっ！！」

が、全て無駄だった。分厚い冬用の羽毛布団でも、母さんの声には敵わない。

私は渋谷布団から顔を出した。今は本来の目覚ましの任から開放されている電子時計を、チラツと見る。分かりきつてはいたが、表示されている日付を確認したとたん、ため息が漏れる。

「休みたい、休みたい、休みたい……やずみだいよー……」

最後には半泣きになってしまったが、とにかく、今日、私はそれくらい学校に行きたくないのだ。

でも、それは不可能。母さんの仮病を見分ける目だけはぴか一なのである。不良息子の妹は辛い。それでも、行くのよりはマシ！と去年試してみたら、見事に見破られ、こっぴどく叱られた。

「ルナツ！！何時まで寝てるの？！」

母さんの声が段々ヒステリックになってきた。二階に上がってくるのも時間の問題だろう。そろそろ覚悟しないと、大人しく学校へ行っても、反抗して行かなくても……どっちをとっても恐ろしいことになる。

「……しょうがない、行くか……」

私は涙ながらにそう決意した。

「もう……ルナッ！！」

「起きてるって！！」

折角覚悟したのに、これ以上怒鳴られると叶わないので、耳の遠い母さんにも聞こえるよう、自分の出せる最大の音量で叫んだ。

ゆっくりと起き上がり、電子時計の方を見ないようにベツトから降りた。制服に着替えるため、のろのろと筆筭に向かう。私より頭一つ分低い筆筭の奥には、縦に長い窓がある。窓から見える空は分厚い雲に包まれていて、どんより曇っていた。

晴れだったら、外に出るだけで命にかかわるから、意地でも休むつもりだったのになあ……。こんなに曇っていたら、十分歩き回れる。ふかーいため息をつき、私は今日のために買っておいた、強い日焼け止めクリームをあらゆる所に塗りたくった。

ゆつくり時間をかけて身支度を終え、鞆の紐を手取る。と、ふと思いついて、小机の上に載せてある鏡を覗いた。

(……もしかして、もしかしたら……変わっていないかも……) かすかな希望を抱いて、鏡に向かってニツコリ微笑んだ。恐る恐る、唇を開く。前歯……下の歯……。どうか、どうか普通の大きさでありますように……。

私の願いは、犬歯が見えた途端、砕け散った。鏡に映る上の犬歯は、歯肉に突き刺さるギリギリの長さまで伸びていた。歯形に沿ってはいるが、先は鋭くとがっている。

……そう、まるでオオカミの牙のように。

私はがつくりと頂垂れたが、そんな時間はなかった。下に向けられた視線の先には、起きる直前イライラに任せてほうり投げた目覚まし時計アナログ二号が転がっている。今まで私に何度投げられたか分からない、でも一度も壊れたことのないタフな時計の短針は、もう8の

近くまで接近していた。そして、長い針は10を差して……って……
「……げ。」

学校に行きたくはないが、折角起きているのに遅刻するのは嫌だ。
勿体無い。

……よし、学校へ行こう。

でも、絶対に ご飯 を食べるのは一日三回。朝は抜く！いいね、
ルナ？！

心の中に深く誓いを刻み込んで、鏡の中の自分を強く睨んだ。ゆ
つくりと、犬歯を隠すためのマスクをつける。そして、自分の鞆の
紐を掴んでドアを開け、階下へと風のよう^{した}に下りる。台所を通り過
ぎるとき、母さんの叫び声が聞こえた。

「ご飯は?!」

こんな時間で、食べる時間なんてないって、分かってるくせに！
「いらないっ！」

リビングを振り返りもせずに、私は即答する。

「だから早く起きなさいっていつてるでしょう！」

母さんのお説教を背中に受けながら、「いつてきます！」と怒鳴
り返し、玄関で靴をつっかけ半分転びそうになりながら外へ出た。
いつもは学校まで歩いて20分ぐらいかかるけど、走れば10分ぐ
らいで着ける。まあ、相当頑張らないといけないけど……。

玄関を出て、母さんの声が聞こえなくなった所で、私は靴をちゃ
んと履き直した。拳を握り締め、気合も入れ直す。

「……よしっ！」

そして、駆け出した……のだが、二、三步進んだだけで立ち止ま
ってしまった。近所のおじさんが、私の隣を通っていったからだ。
おじさんの動きを思わず目で追うと、それと共に体が自然と回転し

た。おじさんから目が離せない。…否、私は別に、そういう趣味ではない。

私の目は、おじさんの首筋に（・・・）釘付けになってしまっていたのだ。

食い入るように見つめていると、くすんだ皮膚が透けて来て、その下でドクドクと波打つ血管が見えてきた。

真っ赤な真っ赤な血……。

私の喉が、ゴクリと鳴る。

……つて！！家出た途端、誓い破つてどうすんだ！！私は頭を思い切り振って、頬を叩き自分を取り戻そうとする。

でも、あのおじさんの血が、飲みたくて飲みたくて仕方ない。私の中の怪物が、ゆっくりと首を擡げる。私はさっきつけたばかりの犬歯をごまかすためのマスクを剥ぎ取った。そうしている間にも、目がおじさんから離せない。

歯形に沿っていた牙が真っ直ぐになり、どんどん伸びていく。私はまるで魅入られたかのようにおじさんに向かって歩いて行った。そのうちに、牙はとうとう唇の外に出てしまった。

大またで近寄ると、あつという間におじさんの背後に辿り着く。無意識のうちに気配も消しているので、おじさんも他の通行人も全く異変に気付かない。すぐ目の前に、ゴウゴウと音を立て、狭苦しい血管を流れる、愛しい血。もうすぐ、飲んで自由にしてあげる。私は口角を少し上げて笑った。

まるで、吸血鬼のように。

…そして、おじさんの首筋に噛み付いた！！

私の鋭い牙は、おじさんの首の皮膚をいとも簡単に貫いた。伸びていく間に、先が針のように鋭く細くなっていたので、血がバアッと噴出したりはしない。貴重な血を無駄にするなんて、バカなことはいらないのだ。

一旦差した牙を抜き、血が一滴も流れださないうちに、傷口に唇を当てる。口を首筋に当てる、その一瞬の間に、血を飲むのに邪魔にならないよう、歯は元の長さにもどっていた。

じわじわと口の中に鉄の味が広がり、私ののを潤していく。いつもなら、血の味なんて吐き気を催すほど嫌いなのに、今の私にとっては至高の味。地球上で、これ以上のご馳走はない。おじさんの方に吸い付きながら、私はうつとりとした。

（最高……♪）

心の中でそう呟き、ニヤリと笑った。ホラー映画の女優も真つ青な、バンパイアらしい、魅惑的で、艶やかで、恐ろしい微笑。

そのとき、私はふっと我に返った。自分がおじさんの首に噛み付いているのに気付き、呻く。

（うわぁ……またやつちやった……）

口の中には、しょっぱい血の味が広がっている。私は底抜けに落ち込んだ。

ハロウィーン。聖なる日の前夜祭。子供たちは魔女や狼男、妖精

など、様々に仮装して、ジャックオーランタンの輝く戸口へ立ち、
「トリックオア、トリート！」とお菓子を要求する。子供たちのは
しゃぎ声が響く夜、年に一回の、ハロウィーン。

10月31日。

……私が一日だけ、バンパイアに変貌してしまふ日なのである。

その日はハロウィン

私がバンパイアになった経緯いきざつを説明するには、10年程前まで遡らなくてはいけない。

小学2年生のときの私の担任は、大学を出立ての、新人の先生だった。その新米先生は、いつもニコニコしていたし、変に威張ったりもしなかったので、生徒からの人気が高かった。笑顔が素敵で、純粹で、でも、捻くれた私は、そんな先生が大嫌いだった。…片思いしていたヒロ君が、先生のことを好きだったから。

学活では、主に話し合いをしたり、地域学習や、季節の行事についての勉強をする。真面目な先生は、毎回テーマを必ず用意していた。そして、10月30日、今日は、勿論、

「今日は、ハロウィンについて勉強しましょう。」

”ハロウィン”と黒板に大きく書き込んで、先生はこちらを振り返った。

先生の言葉に、教室はしんと静まったが、それも一瞬だけで、すぐに雑談でうるさくなった。先生は、自分のほうに注意を向けようとがんばったのだが、全然声が届かない。柔和な先生の顔がキツと険しくなり、一度深く息を吸い込んで、口を開きかけた。

が、すぐに閉じてしまう。

「はあ……」

この先生、気が弱すぎるのか、新学期から一度も私達を叱ったことがなかったのだ。いつもギリギリのところで言葉を飲み込んでし

まう。そんな先生の態度にも、常にイライラしていた私は、むつつりと黙り込んだ。

先生は空しく教卓に立ち、微笑んだ。

「ハロウインは、明日、10月31日です。」

…あれ？今、31日って言った？

先生は、自分の”間違い”に全く気付かず、真面目な顔で話を続けている。

「ハロウインは、元は外国から伝わったもので……」

「はあーい！」

そこで私は勢いよく手を上げた。先生は、話の途中で遮られる事は予想外だったらしく、少しびっくりしていたが、すぐに笑顔を取り戻した。

「……なにかな、ルナちゃん？」

これで先生の揚げ足がとれる、イライラも解消できると、内心意地悪にほくそ笑んだ。私は椅子から立ち上がって、自信たっぷりに言った。

「先生つ、ハロウインは31日じゃなくて、30日です！」

そう言った途端、教室はしーんと静まり返った。すぐに笑いで包まれると思っていた私は、すっかり面食らってしまった。

「だ、だって……今、先生、31日って、言ったでしょ？」

おずおずと先生に確認しても、先生は私の言っていることが理解できないらしく、すごく困った顔をしている。

「ハロウインは、30日、今日だよね？」

私の言葉を聞き、先生は、分かったというふうにはたと息を呑むと、困ったように視線を泳がせた。しばらく唇を噛んで黙ったままだったが、やがて迷いながらも口を開いた。

「ルナちゃん、ハロウインはね……31日なの……」

「……へ？」

「ルナちゃん、教えてくれてありがとね、でも、31日であつてなんだ」

「なに自信満々に言つてんだよ！」

私力がなく座り込むと、隣の席の男子に大声でバカにされた。途端に、教室がみんなの笑い声で沸く。

「間違えてやんの〜！」

「しーったか！しーったか！」

お調子者の男子が騒ぐ。ヒロ君も笑っているのが見えて、私は唇を噛んだ。先生が懸命に、ざわめく教室を静めようと頑張っている。ヒロ君に笑われた。私は恥ずかしくて恥ずかしくて、顔を真っ赤にさせて俯いた。

その日の夜。私はまだ恥ずかしさと怒りを堪え切れずにいた。勘違いをしていたくせに、あんな堂々と間違いを指摘するかのよう……
…たまらなく、恥ずかしい。

私は自分への怒りを紛らわせるために、お気に入りの映画を見ていた。吸血鬼（バンパイア）の映画だ。バンパイアは、黒いマントを翻し、女の人を次々と襲っていく。血を吸われた人は、バンパイアの手下になり、どんどんパニックが広まって……

私は小学生の癖にオカルト好きだった。今思えば、妙にませている所も含めて、相当変人だったと思う。私は、パートで母さんがいないことをいいことに、子供には多少刺激の強い映像の流れる画面を食い入るように見つめていた。

「くそっ、私がバンパイアだったら、クラス全員の血、残らず飲みつくしてやるのにつ……！」

映画も見終わり、自分の部屋に上がると、自分のことを棚にあげ、怒りに任せて枕をボンボン叩いた。そのせいで端から綿が出てきてしまい、慌てて中に押し込んだ。

ハプニングに多少興奮は収まったが、今日の失敗や映画が頭の中にくるぐると渦巻き、思わず私は天井を見上げながら呟いた。

「…バンパイアになれたらなあ……」

その時、フツツという忍び笑いが聞こえたような気がして、私は跳ね起きた。が、当然誰もいない。でも、とても幻聴とは思えないくらいはつきりと聞こえた笑い声に、窓の外を覗いていると、背後に、気配がした。禍々しい、気配が。

「そなたの願い、叶えてやろう」

低くしわがれた声が耳元で囁かれる。逃げなきゃ、と思っ
ていても、体が動かない。そして、

「――っ」

首筋に、チクリと針で刺されたような痛みが走る。そして、注射のように、何かの入ってくる感触。

「これでそなたも、我等の仲間じゃ」

さっきの声が可笑しそうに呟く、それを遠くに聞きながら、私の意識は飛んだ。

気がついたら、朝だった。

「ん、あ……」

朦朧とする頭を擦って、起き上がると、昨日の服のまま、ベットに横になっていた。ぼんやりと、目の前の窓を見つめる。すると、おぼろげながら昨日の記憶が戻ってきた。はっとして、首筋に手を遣ると、傷口はなかった。噛まれたはずの、そこ。

「…夢、だったのかなあ……」

子供だった私でも、それが普通なのだろう、と思っていた。

しかし、歯磨きをしているとき、前歯を磨こうと、にーっと唇を開くと、

「へ……何これ?!」

犬歯が、下の歯肉に刺さらんばかりに、大きく、伸びていた。

初めてバンパイアになった日は、散々だった。通行人（なぜかいつもおじさん）から目を離せなくなって、いつの間にか血を飲んでいて、果てしない自己嫌悪に陥ったり、異様な歯を隠すために四苦八苦したり……。

次こそはやらないと固く誓った次の瞬間、人の首筋に噛み付いているのに気がついた時は、最高に落ち込んだ。

それでも誘惑には勝てず、31日はたくさんの人から血を頂いた。勿論、人を殺すまではいかない。少し血を口にして満足すると、自分が戻ってきて、コントロール出来るようになるからだ。

多い日は、一日6人くらいから血を飲んだ。

でも、私は今まで血を飲んだところを人に見られたことはない。

今でも、ほら……ね？道のド真ん中で女子高生がおじさんの首に噛み付いている、異様な状態なのに、全然騒ぎにならない。みんな、固まってるでしょ？

私がバンパイアの本能に飲み込まれると、まるで時間が止まってしまったかのように、周りにいる人の動きが、完全に止まるのだ。だから、今まで警察につれてかれたり、精神病院に入れられたりすることはなかった。

だから私は、全く気づかなかった。
彼が、私に近づいていることを。

「おい、バンパイア」

気付いた時にはには、もう遅くて。

「動いたら、撃つ」

黒い銃口が、私を向いていた。

逃亡ハンター

「動くな、勝手に動いたら、殺す」

「はい」

生まれて初めて感じた生命の危機。やっとのことで絞り出せたのは、聞こえるか聞こえないかの掠れ声だった。自分の眉間を真っ直ぐ向いている銃口から目を離せず、私は固まっていた。血を吸っているのを見られた、正体がバレた、これからどうしようという焦りも、どこかへ消えてしまっている。

「まず、その汚い口を離せ」

抵抗の意思はないのを表して、ゆっくり唇を離す。傷口から離れる寸前、十数年培ってきた癖で、無意識のうちにすっかり傷口を舌でなめとっていた。こうすることで、止血と同時に傷を目立たなくすることができるとの。おじさんの肩には、針で刺されたような小さな傷しか残っていない。

「そいつの左に立て」

私はぎこちなく移動し、直立不動になった。銃は私を追い、一時もぶれることはなかった。

「いいか、逆らったら、すぐに打ち抜くからな」

「……」

「返事は」

「…分かりました」

「これを飲め」

そういつて伸びてきた手のひらには、濃い緑色をしたカプセルが乗っていた。まずそう。体に悪そう。でも飲まなかったら一瞬で死ぬ。いや、これ飲んでも死んじやうかも、でも飲まなかったら確実に死ぬ。

恐る恐る手を伸ばし、カプセルを取る。

どこからどう見ても毒だ。のどがごくりと鳴る。

「早く飲め」

目の前の銃、手の中の毒。どっちに転んでも、うう……お母さん、お父さん、私は先に死ぬかもしれませんが、親不孝な娘をどうか許して！

「……はい」

目をつぶって、味を感じるまもなく一息に飲み込む。

「飲んだか？口をあけて見ろ」

覚悟を決めてちゃんと飲んだのに、疑うなんて失敬な。できる限り大きく口を開ける。

「よし」

確認し終わると、彼は意地悪い笑みを浮かべた。

「今のは毒だ」

「……やっぱり」見るからに、だったし。

「だが、すぐには死ぬことはない」

銃をおろしながら、彼は面白そうに話し始めた。

「それは従順の薬と言ってな、主人の命令には逆らえないようになるんだ」

「従順……」

「カプセルの中には、即効性の毒が入っている。人間よりも丈夫なバンパイアだって一瞬で殺せるぐらいの猛毒だ。もう既にお前の全細胞の中にもぐりこんでいるだろう」

細胞の中に悪者顔のバイキンが入り込むイメージがぱっと浮かぶ。なんだか考えるだけでむずがゆくなった。

「……じゃあ、もう私は死ぬの？」

「だが、その毒は主人が命令したときのみ効力を発揮する」

「へ？」

「こんな低脳ばかりの世界と違って、俺の世界は進んでいるからな、

そんなことも可能なんだよ」

「…便利」

「今お前の飲んだものには、俺の印が付けてある。だから俺が一言呪文で毒を解放すれば、瞬きしてる間にお前は事切れるだろう。もうこんなもので脅す必要もなくなったわけだ」

そういつて銃をふらふらと弄ぶ。

「死にたくなかったら、俺の命令に従え」

口の端をあげて笑い、見下した目で私を見やる。そんな生意気な態度に……私はキレた。

「…イヤだ」

「あ？」

「結局殺されるんなら、あんたにいい思いさせたくない」

「…ならば、今すぐ死んでもらうぞ」

「ああ、殺せば？さっさと殺しなさいよ。…でも、あんた私にさせたいことあったんじゃない？」

「……」

「だから私は今も生きてるんでしょ」

私の言葉に押し黙る。ふう、よかったあ……呪文とやらを言わないところを見ると、やっぱり図星なのかな。

「私にいうこと聞かせたいんだつたら、この毒の解毒薬をよこしなさい、じゃないとやらないから」

精一杯、やれるものならやってみる、と胸を張り、相手をにらむ。胸の中はドッキドキだ。

睨み合い、時間が止まる。息の詰まる様な間。でも負けるわけにはいかない。命が掛かってるんだから！

沈黙を破つたのはため息だった。

「…はあ、仕方ない」

「ならば、今日一日、命令を聞いたら解毒薬をやるう」

「いや！今すぐ！」

「ダメだ。それならばここで殺す。お前を使えなくなったとしてもな」

「だって最後に渡してもらえないかもしれないじゃん！」

「この譲歩を認めないのなら、ここで殺す」

再び睨み合い。でも、さつきとは違って私は負ける気がした。はあ……結局は、こうなるのか。

「あーもう！分かった、分かりましたよ。殺されるかもしれないけど、聞きますよ、言うこと」

「…俺は誇り高き魔族だ。約束は守る」

しぶしぶながら、だがきっぱりとした言葉。

「…分かりました」

とりあえず、生存確率30%、くらいかな？

「そういえば、なんで時間が戻ってないんだろ？」

少し余裕が出てきて、ようやく気づく。止血をすれば時間は元に戻るはずなのだ。だからいつもご馳走になった後は必死で離れなければならなかった。

「…俺が止めてるからな」

そういえば、魔族、だっけ？

「魔法…とか、使ってるの？」

「魔族は魔法が使える」

「はあ、そうなんですか…」

どことなく自慢げに話す彼の言葉も、すんなりと受け入れる。私自身バンパイアなんて本来あり得ない存在なんだから、順応が早いのは当たり前だろう。すると、彼は意地悪い笑みを浮かべた。

「ちなみに…職業は“バンパイアハンター”だ」

——…小さい頃、人は外見で判断するなと教わった。が、結局は

人は見た目が9割。初めてついたイメージは中々払拭できない。

「……えーっと、バンパイアハンターって、バンパイアを殺す……やつじゃなかったっけ？」

おずおずと尋ねると、彼は口の端をさらに歪めた。

「ああ、貴様のような奴を殺す仕事だ」

——そして、人間には偏見というものも存在する。それまでの生活の中で、構成されてきた経験値。この背格好なら、こういう中身のはず、とか。

「はあ、じゃあ……あの、私のこと、やっぱり殺す気？」

「約束してしまったからな……まあ、機会はいつかに取っておくかな」

残念そうにつぶやき、言って銃をクルクルと回す彼の身長はおよそ120cmほど。膝までのジーンズに、紺色のシャツ、黒いスニーカー。上に灰色のパーカーを羽織っている。異常に地味な格好をしているのを除けば、普通の小学生2年生に見える。

こんな子供に毒薬を飲まされたり、銃を向けられるなんて、中々受け入れられない。人間の子供がそんなことを出来るなんて、散々それまで脅されていたとしても、実感が沸かない。

が、その子は人間ではなかった。

「じゃ、行くぞ」

そう言っただけで歩き出した彼には……

尻尾。

ジーンズのお尻の縫い目の部分から、黒い尻尾が生えていた。30cmほどの、ふわふわの毛糸のような長くて黒い尻尾が揺れている。

「……かわいい」

「あ？」

思わず漏れてしまった声に、振り返った彼の鋭い視線が突き刺さる。私の胸ほども身長ないくせに、なんちゅう目付きしとるんじゃ。

「や、なんでもないです……」

あわあわと弁明する私を鼻で笑い、また歩き出す。あー触りたい、でもそんなことしたらすぐ殺されそう。付いていきながら、集中を逸らそうと、ほかに目を遣る。

ハンター君から目を離れたとたん、出勤途中のおじさんが目に入ってきた。冴えない眼鏡やらよれたスーツやらも気にならない。私が首筋に自然と吸い寄せらせる……と、グイツと背中を抓られた。

「いたあつ」

容赦ない抓りに目を潤ませ、ハンター君を軽く睨む。

「さつさと案内しろ、ノロマ」

「年上に向かってノロマってねエ……う」

もう見慣れた銃口が私に向く。打れないと分かっている、条件反射で身がすくむ。

「やっぱりまだ使えるな、これ」

面白そうに銃をしまいながら、あごを使って命令を出す。

「黙って歩け、ウスノロ」

16歳の吸血鬼である私は、すきつ腹を抱えながら、物騒なものを持った見た目小学生に脅されトボトボ歩いていくのでした。はあ、私は無事に今日と言う日を生き残れるのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9574m/>

バンパイア&パンプキン！

2010年12月19日04時32分発行